

江戸雪歌集

『カーディガン』

(青磁社)

第八歌集。父の死による悲しみ、喪失感、虚無感、諦観の中で、世界の循環をつぶさに見つめ、丹念に描いた作品。中でも胸を打つのは、老いた母を詠んだ歌である。

なぜ死ぬぬ訊きくる母に答えざり貴景勝は今日も突き相撲

寒いとか暑いを知らず古い母はときには鳥にまじって笑う

窓につく雨のしずくを見る母よ乗らねばならぬバスがもう来る

一首目、母の言葉に直面し、突き押しを極める貴景勝に子のあるべき姿を重ねる。二首目、昔とは違う母の姿が美しい景で描かれ、悲哀が滲む。三首目、母に帰る事を切り出さなくてはならない心情に胸が絞めつけられる。

このほかにも印象的な歌は多い。

輪になってなんだか人は皆ひとり小さな壇に夏雲あつめ

巻尺が巻き戻されて空までの距離を抱きつつ置かれていたり

一首目、俯瞰した人生が巧みな比喻で表現される。二首目、父の挽歌。空にいる父との距離が抒情的に描かれ、読後に深い余韻を残す。父の喪失の余韻の中で生まれた新たな光のような一冊である。

(尾花照子)

内藤明著

『抒情の構造』

(現代短歌社)

サブタイトルに「喪われた(故郷)の位相」とある。万葉集から近代短歌の成立、つまり子規、鉄幹・晶子、左千夫、白秋、茂吉、牧水、そして空穂、武川忠一、上田三四二へまで。そこまでの短歌史を俯瞰し、時代を大きくまたぐ論考集である。

日本の近代文学において特殊な位相を持っていたのが、短歌や俳句など伝統的な詩型であろう。(略) 伝統詩はその枠が解消してしまえば存在自体が消滅する(略) 連続性を持ちながら、革新性を求めざるを得ないところに、伝統的な定型詩の近代化における宿命があり、ゆえに、矛盾を蔵しながら、それは近代に蘇生したともいえる。

(「近代化」と「短歌」)

と言う。そして、(自然と自己の乖離を知ってしまった近代人茂吉)には(内部と外部の一体を歴史的連続性として身体の内を持ちながら、その連続性をあえて切断しようとした近代の開化の思想があった。)とも言う。

われわれは現在、短歌・俳句という詩型が現存することに疑問を持ちにくい。しかし、明治初期、または戦後の一時期にその存続自体を大きく揺さぶられた歴史があることを意識している必要があるのだろう。今も有機体のように変化し続けるのが短歌なのだ知らされる。短歌史の重層性にくらくらするるのである。

(大松達知)